



日本ラトビア音楽協会ニュース

第11号
(2008年2月25日発行)

日本ラトビア音楽協会事務局

〒229-0014 神奈川県相模原市若松1-14-10 遠藤税理士事務所内
Tel 042-745-3334 Fax 042-740-4725
E-mail 0424668801@jcom.home.ne.jp

発行代表者 加藤晴生

〒277-0823 千葉県柏市布施新町2-18-9 Fax 04-7132-5423
E-mail katohr@earth.ocn.ne.jp

編集代表者 徳田浩

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-31-6-504 柔道新聞編集部
Tel・Fax 03-3203-0363
E-mail htoku@pastel.ocn.ne.jp

平成20年度理事会・総会・新年会

5年に一度の“歌と踊りの祭典” 見学ツアーを実りあるものに…。

日本ラトビア音楽協会は1月27日(日)、新宿三井クラブで平成20年度理事会、総会、新年会を開いた。

今年の活動は、ラトビアが5年に一度、国を挙げて開催する歌と踊りの祭典見学ツアーが大きな柱。第4回指揮者交流の受け入れ、さらに創立5周年記念事業の具体的準備に入る。

理事会

総会に先立ち、12時30分から開催。

総会に図る①平成20年度人事案、②平成19年事業報告及び20年度事業計画及び同20年事業計画、③平成19年度会計報告及び収支計算書・貸借対照表・財産目録、④同20年度収支予算、の全てを全員一致で承認した。

①人事(加藤晴生専務理事)

会長以下理事、監事、顧問は全員留任。新たに、レディマークス寿子・秀明大教授に理事、田中享元ラトビア臨時代理大使(現駐日ラトビア大使館顧問)及び大塚清一郎前ラトビア大使に顧問、原健之、黒沢歩(リガ在住)両氏に運営委員をお願いする。

②事業報告・事業計画(加藤専務理事)

3年を経過して活動は落ち着いてきた。ただ会員数は団体を含め166で、やや横ばい状況。昨年は何と言っても天皇陛下がラトビアを訪問されたことが大きく、多くの日本人がラトビアという国を認識するようになったのは喜ばしい。ボーイスカウトの川島会員、北九州の山本顧問、福島の板垣会員など、それぞれの立場で日ラ交流に大きな役割を果たされた(Latvija既報)。当会の主要事業は第3回指揮者交流プロジェクトとラトビア語教室開設が大きな柱だった。指揮者交流では山本さんが見事な指導で短期間に本当の日本語(外国人が歌う日本語ではなく)による演奏を実現し、深く感謝された。ラトビア語教室は1月から2教室

(入門コース・初心者コース)に増えた。大使館が共催され、会場、教材を提供される他、



加藤晴生専務理事

毎回ラトビア人が来てラトビアの良さをあれこれ話してくれるなど比類ない語学教室になった。さらに「ラトビア語通信講座」を検討している。両事業ともラトビア本国で高い評価を受けている。当協会ニュースLatvijaは4回発行した。天皇陛下も愛読されているらしい。

今年は歌の祭典見学ツアーが大きな柱になる。祭典は(同国は“フェスティバル”ではなく“セレブレーション”と呼ぶ)は7月6日から12日まで行われるが我々は9日にリガへ入り、8日間(リガ～ウイーン)、10日間(リガ～リトアニア～ウイーン)の2コースに絞った。参加費は一人40万円前後の予定。現在までの参加申込者は51名。2月からチケットが販売されるので、早めに固めたい。

第4回指揮者交流は今年ラトビアサイドで独立回復90年の多彩な催しがあり、当方もツアーという大きな事業があるので、来年(09年)1月以降に日本で実施する。

会員相互の親睦を図るため近く条件付き(個人情報保護)の名簿を発行する。さらに大使館をお借りしてミニコンサートや講演会も企画する。

5周年記念事業はラトビアの音楽によるコンサート開催を中心に検討を始めている。

③会計報告(遠藤守正常務理事)

主な収入は、会費590千円、交流基金500千円、寄付金596千円、Latvija広告収入980千円(大鵬薬品800千円・名刺広告180千円)などで前年比749千円増。支出では第3回指揮者交流プロジェクト経費が1048千円で、交流基金、名刺広告

天皇陛下もラトビアに大きな関心

会長 藤井 威

当協会は4回目の総会を迎え、先ずは順調な歩みを続けている。今後は音楽の交流だけに止まらず、日本とラトビアの幅広い友好関係の推進という大きな目標に向かいたい。その為に更に一層の会員増を図りたいが、お互いにその努力を続けながらさらに活動の幅を広げていきたいと思います。昨年は天皇皇后両陛下がラトビアを訪問されて両国の親密の度が深まり、天皇もラトビアという国に大変関心をお持ちになっておられる。昨年天皇にお会いする機会があり、私の写真で作ったラトビアのカレンダーを差し上げ、いろいろご説明申上げた。今年は5年に一度の歌と踊りの祭典が行われる。人口240万の国とは思えない盛大な祭典、協会が主催するツアーに多くの方が参加されるよう期待している。我々も全力で良い旅行になるよう努力します。



収入を差し引いた368千円が協会支出となった。次期繰越金は1637千円(内850千円は第3回指揮者交流プロジェクト仮払い計上で決算を終えてないため実質は787千円)。ラトビア語教室は受講料など収入316千円、支出は講師事務局費、ゲスト謝礼、事務費など205千円で、残高110千円。

平成20年度は通常予算の他に5周年記念事業100千円を計上。ラトビア旅行費は各参加費を預かり金とし、その内一人当たり30千円(総額1500千円)を協会としての事業費に計上する。

※詳しい資料が必要な方は事務局へ。

【理事会出席者】藤井威会長、岡村喬生副会長、加藤晴生専務理事、斎藤哲・遠藤守正・徳田浩各常務理事、長沢護・額原信二郎・田摩勇・レディマーク寿子(新)各理事、稲山輝機監事、村山喜一郎・山本徳行・田中享(新)各顧問、関口教和・小俣泰英各運営委員。(計16名)

総会・新年会

13時30分開会、関口教和運営委員が司会を務め開会を宣言、藤井威会長挨拶のあと金岡隆運営委員を議長に選び、全ての議案(理事会参照)を満場の拍手で承認した。出席は70名、今年もヴァイヴァルス大使をはじめ館員全員が出席した。大使挨拶の最後に、前年、ラトビアに顕著な貢献をされた山本徳行、川島泰彦の両氏が同国外務大臣からの感謝状を贈呈されるサプライズがあった。引き続き、岡村喬生副会長が乾杯の音頭を取って新年懇親会に移った。

すっかり顔見知りになった会員相互の談笑・親睦が続く中、新役員のレディマークス寿子、田中享、大塚清一郎各会員が紹介され、さらに白井朝さんのバイオリン、河西麻希さんのサクソフォン、小田陽子さんの歌など、この日は当協会が誇る女性アーティストが熱演し、最高の盛り上がりを見せた。

総会出席者(順不同)

(除く理事会出席の16名)
ヴァイヴァルス大使他館員5名、藤井明子、加藤民子、小山田安宏、川島容次郎、川島泰彦、板垣忠直、椎野寿子他2名、小川翠、飯塚美沙子、岡安宏二、岡安陽子、白井朝、潮田侑樹、石川晴彦、八木昌子、緑川敦子、林智恵子、山本健二、堀口大樹、小田陽子他1名、三巻義夫、中村昭貞、相原徳子、大成宣行、中嶋勝彦、金岡隆、ペロウンスク・ドミトリリス、今

野季久代、神郡克彦、矢田ちひろ、矢田寛子、大塚清一郎、石川了、石川弥貴、清水光子、板垣敏子、加藤洋朗、堀紘子、河西麻希他1名、中島護、畦上明、丹治亮介他早稲田大学クレークラブ員4名



今年も会場に石川弥貴会員(草月流師範)制作の豪華な生花が飾られた。

ラトビア外務大臣から山本、川島両氏に感謝状 “会員全員にお礼を申し上げねば…”

ヴァイヴァルス大使

皆さん今日は。私は音楽協会の催しには必ず参加していますが、それは会員の方々がラトビアに一番近いところにおられるし、一番ラトビアの為に貢献して下さっているからです。皆さんのお陰で2007年は日本とラトビアにとって、最も素晴らしい年になりました。音楽だけではなく、スポーツ、教育、政治、ビジネスの面でも音楽協会の方々が大変貢献して下さいました。

日本から多くの方がラトビアに行かれ、多くのラトビア人が日本に来ました。川島さんはボーイスカウト最高の勲章であるシルバーウルフをラトビアに戻すために尽力され、北

九州の山本さんには大阪世界陸上に参加したラトビア選手のキャンプ地などお世話を頂きました。選手達は世界を回ってこんなに暖かいもてなしの心を初めて体験しました。

昨年最大の催しは天皇皇后のラトビア訪問でしたが、推進していただいた大塚大使に深くお礼を申し上げます。こういう風に話すと殆どどの会員の方にお礼を申し上げねばなりません。改めて、皆さんに明けましておめでとう、と申上げ、今年ももっと



素晴らしい年になりますようお祈りします。最後にこの場をお借りして、お二人の会員（山本徳行、川島泰彦氏）に外務大臣から預かった感謝状をお渡しいたします。

山本徳行氏 全くのサプライズでびっくりした。ご好意に感謝します。私はスウェーデン名誉領事をしているが、同国大使から“スウェーデンのこともよろしく頼みます”といわれるほど、昨年はラトビアの為に一生懸命動いた。今年はリガ大聖堂少年合唱団北九州公演（12月3日）をラトビア支援の会で主催することにし、目下関係方面に支援をお願いしている。これからも出来るだけラトビア支援の為に働きたい。



感謝状を授与された山本徳行氏（左）と川島泰彦氏

川島泰彦氏 私もサプライズで戸惑っていますが、この素晴らしい栄誉は私ではなく、恩人ラジンの功績がラトビア国で評価されたことだと思います。ボーイスカウト100周年イベントの一つとして、英国でシルバーウルフのラトビアへの返還式が無事行われました（Latvijaに詳報）。今年から少年スカウトの相互訪問を具体化して日本とラトビアの親善を図る。最後にこの素晴らしい会に入会させて頂いたことを感謝したい。

【新役員紹介】

異文化に育った人々ともっと深く付き合えねば…

レディーマークス寿子氏（新理事）

（専門の国際コミュニケーション論の立場から）“日本人はもっと違った民族、異なった文化に育った人々と深く付き合っていないと、アジアでも中国や韓国に取り残される”と警鐘を鳴らしたあと（別掲「鎖国の名残り」参照）、私は英国と行ったり来たりしているし、コンピューターを使えず未だに手書きを続ける状態ながら、日本にいる時は精一杯いろいろな会合にも出席して皆さんと交流を深めたい。



日ラ関係は一気に花が咲いた

田中 享氏（新顧問）

ラトビア大使館のお手伝いをしている。皆さんとのコミュニケーションを深める役割りを果たしたい。昨年
の沖縄名誉領事館開設に次いで、北海道・東川ラトビア館の井下佳和館長の名誉領事就任も正式に決まり、3月に正式開館の運びです。今年は日本の豪華客船がリガに寄港するなど、昨年から今年にかけて日本とラトビアの関係はいろいろな分野で、春がきて花が一斉に咲くように盛り上がっています。



爆笑！外国語珍講座

大塚 清一郎氏（新顧問）

昨年の4月までラトビア大使を勤め、前回の懇親会では唄う大使として自己紹介させて頂いた。今年はねずみ年の年頭挨拶をしたい。“ハッピーチューイヤー（爆笑）”“座布団1枚ください”。ところで干支から何故、猫が抜けたか。ねずみから抗議されて猫は“キャット”された（会場から座布団2枚の声）。フランス語でコンビニは“セボンエロボン”、足し算は“ジュートジューワニジュ”“ジュートニジュワサンジュ”。（発音が見事なフランス語で会場はさらに爆笑の渦…）。次は韓国語、サンドイッチは“ハムハサムニダ”、ゴルフのダブルボギーは“パーブラスニダ”。中国語で蚊は“チーサー”。（いやはや！）笑って頂いてありがとう。次回はラトビア語でやります。



白井 朝さん



河西麻希さん

【音楽演奏】

1、バイオリン独奏：白井朝さん（ピアノ：潮田侑樹さん）、ブラームス作曲「スケルツォ」

『3月1日に神戸で岡村副会長らとコンサートを開きます（前号参照）。』

2、サクソフォン独奏：河西麻希さん、ガルータ作曲「ダイナ」（原曲はバイオリン曲）、ラトビア民謡「テク・サオリテ・テセダマ」

『昨年ラトビア国際サクソ音楽祭でオープニングソロ演奏した他、今年9月にはラトビア国際宗教音楽祭にも参加します。ラトビアで、ガルータ作品のレコーディングもします』。

3、独唱：小田陽子さん（ピアニスト到着遅れカラオケ）、Rパウルス曲「マーラが与えた人生」、アメリカ



小田陽子さん

カンボップス「私の青空」
『ふとした縁で、1920年前後に関西学院大で教鞭をとったラトビア人のことを知りました（別掲）。これからもラトビアに関わっていきたい。ライブなどに是非お出掛けください（スケジュールはHP参照）。』

天皇陛下がラトビアの歌を詠まれる

昨年は天皇皇后両陛下がラトビアを訪問され、日本とラトビアの距離は一気に縮まりました。天皇は年頭の感想で「新しい年が国民にとって幸せなものであり、世界

の人々が互いに信頼し合って暮らしていくことを願っています」と述べられ、併せて昨年詠まれた歌

5首が発表されました。その中の1首が次の歌です。陛下のラトビアへの強い思いを感じました。

《ラトビア占領博物館》

シベリアの凍てつく土地にとらわれし
我が軍人（いくさびと）もかく過しけむ

ラトビア民族「歌と踊りの祝典」

2003年ユネスコ指定
人類世界無形文化遺産の傑作

吉田 ラスマ



数世紀に亘る外国支配を経た後、19世紀の社会及び政治的变化はラトビア人に民族意識を目覚めさせました。彼らは多数の外国による抑圧や特定言語の強制使用にもめげずラトビア人としてのアイデンティティ再発見に努めました。このことを彼らは歌を歌うことによって行ないました。ラトビア民謡、即ち、ダイナス(dainus)は何世紀にも亘る古い歴史を誇り120万曲以上の民謡が今日までに収集されました。ダイナスは通常4行の詩から成る節を一単位として構成されています。そのテーマは一般的に人生観、愛、世界秩序や人の生誕、結婚、及び死に纏わる人生の節目の重要な儀式が含まれています。伝統的にラトビア民謡は家庭内で祝い事がある時や季節ごとのお祭りのときに歌われてきました。

ラトビアの合唱音楽の起源は十九世紀中葉に遡ります。合唱することはラトビアにおいては歴史的にみて独特な存在でした。それはラトビアが未だ民族国家ではなく、また知識階級によるラトビア語の使用が殆ど無かった時代では歌がラトビア人を統合する主要な手段であったからです。(訳者註：当時のラトビア人知識階級は主として独語、ポーランド語、露語などを使用し、ラトビア語は農民(奴)の言葉として使用を控えたといわれる。)

最初のラトビア民族歌の祭典は1873年リーガで開催され、45の合唱団、1,008人が参加しました。この祭典の主目的はラトビアで国民の間にラトビア人であることの一体感を醸成することでした。そしてこの目的を遂行するためにラトビア民謡とラトビア人作曲家による曲を歌手手及び聴衆が一体となって、ラトビア民族衣装を着飾って歌ったのです。

民族歌の祭典の開催は、その後、定期的に行なわれたわけではありません。第二回目は1880年、次に1888年、1895年、そして1910年というように行なわれました。祭典参加者数は逐次増加しました。歌う内容も次第に多種に亘りまた難曲にも取り組むようになりました。

Jurjans, J.Vitols, Darzins といった現代ラトビアの優秀な作曲家群により作曲された歌が祭典の主流を占め

るようになって現在でも尚歌われています。

1918年ラトビア共和国の成立後、第六回歌の祭典が6,526人の参加の下、1926年に開催されました。この年は歌の祭典のメインとなる演奏会のほかに、はじめてラトビア文化を代表する多くの音楽企画が実施されました。即ち、交響曲、独唱、オルガン曲、就中、最も傑出した合唱である一オペラと演劇一です。最も美しい民族衣装が数々の賞を獲得しました。

次の歌の祭典は1931年と1933年に開催されました。第九回でラトビアが未だ独立を保っていた時代の最後の祭典は1938年に行なわれました。この祭典で合唱団には14,456名の歌手と交響楽団には250名の演奏者が参加して出場しました。

第二次世界大戦後初の祭典は1948年に開催されました。当時ラトビア国民は歴史の新たな現実に立ち向かわざるを得ない状況に置かれていました。即ち、ソビエト体制の確立とラトビアの経済基盤の変化のみならず共産主義者によるラトビア人人口の膨大な喪失、さらに西側諸国への多数の移住という現実と直面したことです。

第十回歌の祭典は基本的に今日まで続いている新しい組織体制の下で開催されました。祭典運営予算はラトビア政府より拠出されました。この年、初めて民族舞踊会が歌の祭典のプログラムに取り入れられました。合唱団には14,542名の歌手が、舞踏のグループには921名が参加しました。この祭典では199名の演奏者で構成された5組の吹奏楽団が伴奏をしました。祭典の開催時期は7月に決まりました。これは7月21日にラトビアが正式にソビエト連邦に編入されたことによります。1948年の祭典はこの種の祭典の第一回目とされています。

ソビエト連邦による占領下においてもこの祭典は定期的に開催されましたが、開催に際してラトビア側はある程度の政治的妥協をせざるを得ませんでした。祭典のプログラムのほぼ半分がソ連の歌で占められしか

も祭典そのものが共産主義体制の様々な記念祝典のために捧げられたのです。こうして第十四回歌の祭典、即ち1965年のソビエトラトビアとしての第五回祭典はソビエトラトビア成立25周年記念日に捧げられたのです。1970年に開催された第十五回、即ち第六回歌の祭典はソビエト連邦占領下のソビエトラトビア30周年記念およびウラジミール・イリッパ・レーニン生誕百年記念のために開催されました。その次の祭典は丁度3年後に開催され、その時はソビエト連邦成立50周年記念で、ラトビアの歌の祭典百周年に当たるものでした。

1985年の第十九回、即ち第十回祭典はソビエトラトビアのもとで挙行された最後の祭典でした。

それは第二次世界大戦勝利の40周年記念とソビエト連邦によるラトビア占領の45周年記念に捧げられました。この時は合唱団には16,850名の歌手、吹奏楽団には1,650名の演奏者と6,400名の踊り手が参加しました。コクル、ラトビア弦楽器の使用、様々な合奏、合唱で行なわれ27の夫々が異なる民族グループも参画しました。この年1985年は変化という風がソビエト連邦中に吹荒れ、この歌の祭典はレパートリーが余りにもソビエトの歌に偏り過ぎラトビア民謡が含まれていないとして強く非難されました。

本国在住のラトビア人たちは歌の祭典のレパートリーを決めるにあたって細心の注意を払わなければならなかったのに対し、西欧諸国に避難して共産主義体制を逃れた在外ラトビア人たちは彼らが愛するあらゆるラトビアの歌を歌うことが出来ました。1958年、北米における第一回ラトビアの民族歌の祭典が開催され、22の合唱団と歌手手650人が参加し5000人の聴衆が集まりました。この祭典からラトビア本国では歌うことを禁じられた歌を若い世代の同胞たちのために保存しておこうという伝統が生まれソビエトによる占領時代中もこれらを歌い続けました。2007年インデアナポリスにおいて第十二回ラトビア歌の祭典が開催されました。

1990年に開催された第二十回ラトビア民族歌の祭典と第十回民族踊りの祭典はラトビアの独立回復後初の祭典でした。この祭典には記録破りの35,438名が参加し、内、合唱団への参加者は20,399名でした。そして、海外在住のラトビア人がはじめて参加する機会を得て28グル

ープの841名が参加しました。この行事こそがラトビア人自身の国家を回復した歴史的な時にラトビア国民が感じとった国民としての誇り、意気の高揚や国民としての一体感という感情を十二分に表したものでした。この後、祭典は1993年、1998年、そして2003年に開催されました。

民族歌の祭典の開催期間は通常一週間です。夫々の祭典の開催前には広範囲に亘る計画が練られて創造的な考え方の検討とラトビア人作曲家に示すレパートリーの準備にとりかかります。そして、祭典に出場する合唱団と舞踏グループを競争によって決定します。実際の祭典は開会式から始まります。過去の作曲家と指揮者に敬意を捧げる式で、ある意味では祭典の成功を祈って彼らの祝福を懇願するものです。演奏会は祭典の主柱であり宗教音楽或いは古典音楽の室内演奏から大規模野外演奏行事に及んでいます。同時に並行して行なわれる写真展、芸術展示品と共に民族工芸品の展示があります。自然に絶えず親しむことは視覚でどの様に物を捉えるかという点で大切な要素となっています。例えば舞台の枠に結び付けられた数束の樺の小枝、手摺の周りに巻きつけられたオーク材の花の輪、そして至るところに生花がしつらえられて自然の雰囲気を出しています。

ラトビア人とラトビアの国にとってラトビア民族歌と踊りの祭典の意義を評価したとしても過大に評価し過ぎるということはありません。合唱するという伝統を通してラトビア人は統一国家を造り、且つ20世紀の筆舌に尽くし難い争乱を生き延びることができ、また強大な軍事国家と一度ならず二度までも闘って独立を勝ち取る事が出来たのです。ラトビア歌謡を賛美することでラトビア人は伝統的民族衣装の着用を復活させました。そして今日ではラトビア人は民族衣装を着ることを名誉と考えています。合唱する人達がラトビア人作曲家を鼓舞し彼らの最高作品を合唱に向ける気にさせたのです。

ラトビア人にとって民族歌の祭典は国民の団結と主体性を表す象徴です。それは敬愛の念を持って待ち、尊敬の念で準備し、徹底した献身と名誉を以って実行される国民的儀式なのです。

(訳：原健之)



新しいコンサートホールの話 黒沢 歩

「リーガは新しいコンサートホールを必要としている」とは、地元音楽関係者が口を酸っぱくして唱えてきた文句のひとつと言えるでしょう。新たなコンサートホールの必要性は、すでにソ連時代の1980年代にも認められていました。1988年には新コンサートホール設計コンペが実施されましたが、資金不足で立ち消えとなったという経緯があります。現在、リーガ市内の音響設備の比較的に整ったコンサートホールと言えば、旧市街にある通称グレイトギルドと呼ばれる国立交響楽団が拠点とするホールしかありません。ここを使用した人は誰も、演奏家も聴衆も狭く長い階段を上らなければならないなど、古い建物の限界を感じずにはいないでしょう。

2000年代に入り国内経済が急成長すると、現代的な需要を消化できなくなりつつある文化施設のリニューアルに再び関心が高まりました。2003年、リーガ市が新コンサートホール建設を最初に提案をしました。2004年、政府は同建設計画を国の優先課題の一つと定め、文化省

の所轄としました。それは、コンサートホールのみならず、国立図書館と現代美術館を三位一体とする大型プロジェクトとなりました。これら三大プロジェクトを推進すべく、文化省の管轄下に「新三人兄弟」というエージェン트가2005年に立ち上げられています。

これら新たな重要文化施設は、いずれも旧市街から見てダウガワ河の対岸に、交通の要所となっている二つの橋のそばを建設予定地としています。新コンサートホールについては、二つの橋の間の左岸、ちょうどSASラディソンダウガワホテルの前にある埠頭に建設される予定です。この場所はABダンピスと呼ばれ、かつて石炭を船積みするために作られましたが、今日ではほとんど手をつけられていない状態のまま、市民の憩いと文化活動の場となっています。この場所から眺めるリーガ旧市街のパノラマは絶景であり、ということは旧市街側からもよく見渡せる場所です。設計コンペはすでに実施され、地元の設計事務所による黒い箱形の作品に決まりました。ここに音楽の殿堂ができあがりますと、近隣に建設予定の国立図書館の別名「光の城」と呼ばれるガラス製の山形シルエットと良いコントラストを放ち、さらに現代美術館とプロムナードで結ばれた、ゆったりとした散策コースとなるでしょう。リーガ市の景観も印象も、またガラリと変わるに違いありません。

コンサートホール建設にかかる総施行費は3、800万ラット（1ラッ



リーガ・コンサートホール
完成予想図



ト＝約222円、2008年1月現在）と概算され、その8割をEU機構基金の支援を受けた国が負担、2割が市の負担となります。現在は敷地と設計のさらなる調整が継続中であり、今後の予定では2009年に設計が完成すると、2010年にも施行となる見込みです。「新三人兄弟」の調査では、市民の7割以上が新たなコンサートホールの建設を支持しているようです。

ところで、新たなコンサートホールの建設計画は、リーガ市のみが急務としているわけではありません。西部バルト海岸沿いの古い港町であるリエパーヤにおいても、計画が進められているところか、リーガ市より一足先に建設が完了するかもしれません。こちらは、リエパーヤ市交響楽団が市内に新たに取得した敷地に、1200人収容の大演奏会場を中心とする楕円形がユニークな文化総

合施設を建設する計画が進んでいます。必要経費は2500 - 3000万ラット（うち国とEU機構基金が66%、市が25%、その他支援財団と民間9%を負担）と概算され、年内に建設開始の予定です。計画が順調に進めば、2010年にはここで音楽が奏でられることでしょう。

と、そんな気の長い話はこの辺で終わりにします。リーガで私が目下楽しみにしている音楽イベントは、3月上旬にグレイトギルドで行われるペリーニの歌劇『カプレーティとモンテッキ』です。ここに、今年始めにはN.Y.のメトロポリタンオペラでも絶賛されたというラトビア出身のメゾソプラノ歌手エリーナ・ガランチャがロミオ役で登場するのです。いつもはなかなか入手できない彼女のチケットを、今回は幸運にも手に入れました！

ラトビア大使館訪問

小野寺 駿一

去る1月10日に私は妻と共に渋谷のラトビア大使館を訪れ、初めてペーテリス・ヴァイヴァルス大使にお目にかかった。これは多年クリスマス・カードを交換しているリガのマー・シマヌスさんからお薦めがあったからである。私は我が家とラトビアの関係について若干の資料を使って大使に説明した。

私の父は1936年から'38年にかけてラトビア駐在公使館付陸軍武官としてリガに在勤し、この当時のことを母が「バルト海のほとりにて」という題名で1985年に出版した。この本の中で当時のラトビアは幸福に満ちた独立国であったが、一転して第二次大戦後はソ連に組み入れられ、ソ連によって34万人の人達が殺された反面、人口の25%に当た

るロシア人が送り込まれるなど著しい苦難を嘗めさせられたことが述べられている。

バルト3国は1991年9月にそれぞれソ連から分離し独立を回復した。1994年に、母は妹とともに、独立を回復したリガを56年振りに訪れ、自由記念碑、陸軍墓地など数々の懐かしい場所に再会した。また、かつて親しくしていたが、戦後シベリアに連行されるなど苦勞された方にお目にかかれたのは大きい驚きであり喜びであったとのことである。これらのごことについては1998年発行の「バルト海のほとりの人びと」に述べられ



大使を訪問した
小野寺夫妻

ている。

2003年、私は妻と共に初めてバルト3国を訪れ、リトアニアのビルヌスでマイラ・モアさんに、そしてリガでM・シマヌスさんにお目にかかった。ここでM・シマヌスさんのことについて触れることにする。彼女は1980年頃岩手県の高校で英語の教師をしていた。その頃父が戦前にラトビアに居たことがある数少ない人として岩手県の人から彼女に紹介される場面があった。それ以来彼女と両親との永いお付き合いが続いてきた。その後の彼女はドイツでの高校教師、リガでの雑誌記者、外交官等を経て現在経営コンサルタントをしている。

次にM・モアさんについて述べることにする。1993年7月にザルツブルグでヨーロッパ各国の若い外交官の研修会が開かれた際、当時オーストリア駐在大使をしていた私の弟が

講演を行う機会があったとのことである。そしてその講演後の昼食の際、弟の隣に着席した若いラトビア女性外交官が「最近のラトビアの新聞に、戦前のことであるが、若い日本の外交官夫人が生まれて6ヶ月の赤子を抱いてラトビアに到着したという記事があった。」と述べた。弟は直ちに「それは私の母であり私自身である」と答えたと母に報告した。これがM・モアさんである。弟はこの直後事故死した。M・モアさんは現在ベラルーシ駐在大使である。

父は1987年、母は1998年に他界した。私はこのような70年の歴史を踏まえてラトビア国と日本の交流に寄与することが出来るよう努力したいと考えている。

心待ちにしているリガ演奏 小中学生90人が欧州演奏旅行

加藤 洋朗

NHK東京児童合唱団常任指揮者

私もNHK東京児童合唱団は、本年8月に欧州演奏旅行に出かけます。5日に出発し、19日に帰国するという二週間の旅程で、ハンガリー（ブタペスト、ケチケメート）、オーストリア（ウィーン）、スロバキア（プラスチラバ）、そしてラトビアのリガを訪れます。リガでは以前から親交のある指揮者、アイラ・ビルジーニャさんを訪ね、彼女とリガ大聖堂少女合唱団との共演を予定しています。



アイラさんと当団は、日本ラトビア音楽協会のご協力を頂き、2006年の定期演奏会に客演をお願いいたしました。小学生から高校生まで250人を超える団員は、彼女の明るく大らかな人柄に触れ、生まれて初めてのラトビア語の曲を伸びやかな声で歌い、そして温かく微笑ましい人間的交流を持てたことはとても印象的でした。

当団は55年の歴史を重ね、これまで15回ほどの海外演奏旅行を挙げてきました。しかし、安全上の理由や様々な状況から「児童合唱団」を名乗りながら、海外への演奏旅行へ小学生が参加することはありませんでした。海外から来日する少年少女合唱団や、日本から海外に赴く少年少女合唱団は当然のように小学生が帯同することが常です。今回、16回目の演奏旅行は当団にとって



06年アイラ氏指揮でラトビア曲を演奏したNHK東京児童合唱団

は悲願にも近い小中学生メンバー（90人！）での渡欧となります。

旅行の企画の段階では「ラトビアにも立ち寄りたいが、無理かな…」と逡巡しましたが、今回旅行をコーディネート依頼している貴協会会員でもあるワールドクリエーションの満田氏に話したところ、すぐにアイラさんに打診してくださり「先方も大歓迎で、ぜひ来てほしいと返事が来ましたよ。」とのこと。それならばと、勇気を持ってラトビアに足を伸ばす決心をした訳です。

その後、アイラさんに今年度の定期演奏会の録音を送ったところ、今回の渡欧メンバーが演奏するモーツアルトの「魔笛」を聴き、是非大聖堂の合唱団と一緒にこれを演奏してほしいというリクエストがきました。

この曲は、ほぼモーツアルトのオリジナルに近い構成の大変な大曲なのだが、分け隔てられた人々が楽の音（笛と鈴の）によって結ばれるファンタジーを、二つの国の若者たちが共演することは何ともしてきな感じで今から心待ちにしています。

もちろん、ラトビアの空気を胸一杯に吸いながらラトビアの空の下で、ラトビアの歌を生き生きと歌う団員の顔を見られるのは何より楽しみです。

今回旅が、日本とラトビアの友好に少しでもお役に立てればと願っています。

ラトビアに、＜うた＞の力を考える

田中 宏

合唱指揮者／日本のうたをうたう会主宰

1993年＝大学5年生の頃に早稲田大学グリークラブOBによる演奏旅行に参加したのが、私とラトビアとの出会いです。共演する女声合唱団のための手土産に持参した100本余りの口紅が、空港の手荷物検査場で弾丸と見間違えられ、「運び屋」だった私が厳重な取り調べ(?)を受けたのも得難い経験でした。その旅行では他の国も訪れましたが、なんといってもラトビアが印象深いです。



初めてヨーロッパに足を踏み入れた私は、世界遺産であるリーガ旧市街の街並を見て、中世にタイムスリップしたような思いでした。リーガ大聖堂では、製作された19世紀末には世界最大を誇ったというパイプオルガンの豊かな響きにも圧倒されました。このオルガンの奉献式のためにリストが作曲したオルガン曲を、いつかこのオルガンで聴いてみたい!

ラトビアでの演奏会で共演した女声合唱団「ジントルス」の力強い響きは、まるで大地の匂いがするようで、日本の繊細な女声合唱に慣れた耳には驚きでした。特にアルトの、しなやかで優しくも強靱なこと!あの音色こそ、ラトビア人が古代から信仰する生命の女神「マーラ」のイ

メージなのかも知れません。

彼女たちが、音楽をアタマではなくカラダで感じていることにも感銘を受けました。ゆったりした曲であっても決して棒立ちではなく、明らかに内在したリズムを感じて歌っていることが、わずかなカラダの揺れから伝わってきます。無風の閉ざされた空間ではなく、野外で風に吹かれながら歌っているような、自然なそよぎが心地良いのです。

ラトビアがソ連からの独立を果たしたのは、私が訪れたわずか2年前＝1991年のこと。『歌う革命』と呼ばれている通り、ラトビアの人々は＜うた＞を唯一の武器として、お互いを励まし、支え合ったそうです。2万人の歌い手と10万人以上の観客が一堂に会する（ラトビアの人口はわずか230万だというのに!）音楽祭に、その名残を見ることができるでしょう。

振り返って、今のニッポン。平和で豊かですが、ひとりひとりの活力や、人の音をよく聴いて自分の声と調和させるハーモニー感、人と人が結びつくアンサンブル力が衰えてはいないでしょうか。

◇

現在私は【日本のうたをうたう会】を主宰し、様々な地域で、赤ちゃんから高齢者まであらゆる世代と共に歌っています。会場全体が一緒に歌うことで、ひとりひとりが元気になり、一期一会の参加者同士であって心がつながっていくのが「うたう会」です。日本

ならでは季節感を味わいつつ、作者の心情や作曲当時の時代背景などにも着目しながら、歌詞を大切に歌うことで、歌がニガテな方や数十年ぶりに歌う方でもその曲への興味が倍増し、積極的に歌ってくださいます。

童謡唱歌に限定せず『日本のうた』と呼んでいるのは、『上を向いて歩こう』のような、時代を越えて未永く愛唱される日本のスタンダードを取り入れたいからです。1年と保たずに古びてしまう曲も多い中、『千の風になって』『世界に一つだけの花』などの名曲は、数十年の時を経てとも歌われ続けることでしょう。

ラトビアの人々が＜うた＞の力を信じたように、私も＜うた＞が人に元気を与え、人々をつないでいく力を信じています。「うたによるまちづくり」「音楽によるコミュニティの再生」とも言えるかも知れません。「うたう会」もそのための、ささやかな一歩だと確信しています。

さて、2月11日にカトリック目黒教会で行なう【合唱団Pot-au-feu・10周年記念公演】では、ラトビア合唱曲ステージを設けました。都内有数の残響を誇る聖堂に、無伴奏混声7部の「風よ、吹け」、パイプオルガン伴奏での「マーラの与えた人生」などが響き渡ります。

骨太なラトビア音楽が、＜うた＞の持つ力と可能性を私たちに示唆してくれる…そんなステージになることを楽しみに、練習に励んでいる今日この頃です。

演奏会短信

♪…日本女子大合唱団OGによる桜楓合唱団の第38回定期演奏会が11月20日にすみだトリフォニー大ホールで行われ、委嘱作品「MISSA」（松下耕作曲）を初演し好評を博した（藤井宏樹指揮）。他に三善晃作曲「五つに詩曲」「愛の歌」と、「さだまさし作品集（松下耕編曲）」。

♪…早稲田大学グリークラブ第55回定期演奏会が12月2日、東京厚生年金会館大ホールで行われ、創立100周年を記念する委嘱作品「稲風」（上田真樹曲）演奏（山田和樹指揮）。小田和正にも記念愛唱歌「この道を行く」を委嘱、一緒に歌う場面もあってファンを喜ばせた。他に「アイヌのウポポ」「いつみてもワセグリ波瀾万丈!」。なお同クラブは11月20日、大隈講堂前で800名のOBと共に、校歌「都の西北」などを大合唱して100年の喜びを分かち合った。♪…新春恒例の風呂本佳苗ピアノリサイタル08の東京公演が1月14日、東



大隈講堂前の大合唱

京オペラシティ・リサイタルホールで行われ、今年は「幼き日々への誘い」と題してシューマン「子供の情景」ドビュシー「子供の鎮分」などを演奏した。他に名古屋、西宮でも開催。



第55回早稲田グリークラブ定期演奏会



第38回桜楓合唱団定期演奏会

ラトビア・ルーイヤナ町訪問記 美しい古都の町と新たな絆

北海道東川町企画総務課
地域自治推進室次長
竹部 修司

ラトビアとの強い絆を進めようと、東川町、北海道東川ラトビア交流協

会（青木哲也会長）は、11月5日から12日までの8日間、ラトビア共和国のルーイヤナ町を訪問しました。今回ルーイヤナ町を訪問することとなった経過及び目的につきましては、国際的に開かれたさらなるまちづくりを目指すため、新たな姉妹都市提携を前提とした事前調査であります。

東川町には、現在東川町国際文化交流協会、北海道東川ラトビア交流協会、東川韓国交流協会の3団体があり、それぞれの団体が毎年各種事業を展開しているところでありますが、なかでも北海道東川ラトビア交流協会は、1991年に旧ソ連邦から独立した直後のバルト三国を写真で実感しようと、『写真で見る現代史・ラトヴィアの夜明け』が、東川町文化ギャラリーで開催されたのをきっかけに、首都リガにある『日本語夜間学校』を支援しようと、1992年に町民たちによる「東川町ラトビア交流ボランティアの会」が発足し、日本語の教材を贈ったことがラトビアとの交流の始まりとなり、民間による草の根国際交流は、その後、町内の和太鼓少年団の派遣やスクリデ姉妹の招へいなど、文化交流、人的友好交流へと発展し、また、東川ラトビア館を中心としてラトビアの文化を広く日本に紹介しているほか、日本の伝統・文化をラトビアに紹介するという幅広い活動を行っていることから、昨年東京都にラトビア大使館が設立され、7月に駐日ラトビア大使のペーテリス・ヴァイヴァレス氏が、10月にラトビア共和国首相アイガルス・カルヴィーティス氏が相次いで来町し、その際にカルヴィーティス首相からラト



ルーイヤナの静かな街並み

ビア国内の自治体とぜひ友好提携をと勧められたのが切っ掛けとなつて、ヴァイヴァレス大使の出身地であるラトビア北部のヴィーゼメ地方に位置しラトビア北端のルーイヤナ町を大使が推薦したいということから、両町相互の書簡を通じて、どのような交流が出来るかについて検討することとなり、松岡町長、青木ラトビア交流協会会長他関係機関団体から総勢9名で今回の訪問となったわけであります。

日本を出発する前に、駐日ラトビア大使館ペーテリス・ヴァイヴァレス大使を表敬訪問し、昨年北海道知事、東川町長推薦により提出していました、井下佳和東川ラトビア館館長の名誉領事の件についてヴァイヴァレス大使からお話があり、日本外務省からも承認され、正式に決定したとお聞きし、その後ルーイヤナ町についての懇談をしてからの出発となりました。

リガに到着してからは、在ラトビア日本大使館久保臨時代理大使、ラトビア商工会議所アンドリス・グートマニス所長、ラトビア政府観光局ウルディス・ヴィートーリンシュ局長、リガ市役所ヤーニス・ビルクス市長、ラトビア共和国外務省エドガルス・スクヤ外務次官補を表敬訪問しました。

日本国大使館では、日本ラトビア音楽協会の加藤晴生専務理事が、私達が訪問する数日前に訪問されたお話も聞きし、各関係機関団体からは、ラトビア及びリガの概要や現状の説明を受け町側から質疑をし表敬訪問を終了し、ルーイヤナ町に向けて出発しました。

ルーイヤナ町は、首都リガから約150キロ、車で約2時間半離れた人口約3,700人の落ち着いた地方都市です。

「緑の町」、「芸術の町」、「アイスクリームの町」、「木材の町」と言われており、「お米と工芸・観光の町」、「写真の町」として発信している本町と自然環境、

文化的な背景に共通点があり、文化交流・教育交流のほか、木材取引などの経済交流にも期待が出来るそうだという印象を持ちました。

滞在中、ルーイヤナの主産業である木材関係、パン製造関係、繊維業関係のプレゼンテーションを受け工場の見学、ラトビアー美味しいアイスクリーム製造工場や学校・幼稚園等の教育機関などの見学をさせていただき、日本と違った文化や教育の現場をみることができ、驚きと感動がありました。さらには、私達訪問団のために、町民（出演者含めて約500名）による歓迎のコンサートが開催され、町の吹奏楽団、コーラス、民族舞踊と心のこもった歓迎を受け、文化・芸術のレベルの高さに驚き、さらに、もてなしの心に変え感動いたしました。

私は、ラトビアを今回初めて訪問しましたが、日程的になかなか時間が取れず、帰国する前々日の夜に国立オペラ座での「カルメン」の鑑賞、前日に数時間ではありましたがリガの市内を見学することができました。

リガの旧市街地は1997年に世界遺産文化遺産に登録されロマネスク、バロック、ゴシック建築など

様々な建築様式が集合しており、ホテルも旧市街地にあったことから、街全体が建築博物館のように感じました。なかでも、1999年に再建されたブラックヘッドハウス、ドーム大聖堂、猫の家、城壁などが特に印象的でありました。

街中は、建物の壁にゴミ箱と灰皿が付けられていて、道路や歩道にはタバコの吸殻やゴミが殆どなく、美化も素晴らしい街だと感じました。

ラトビアでは、日本語が第2外国語として学ばれていると聞き、東川町とも縁の深いブリギッタさんが経営する、「日本文化スタジオ言語」も訪問をさせていただき、13歳から21歳までの数名の生徒さんが日本語を学んでおり、初めて会った生徒さん達とも直ぐに打解けることができ、ぜひ日本に来て欲しいと話をしてきました。

最後になりますが、本町では、来年ルーイヤナ町からの訪問団を招待する計画がありますが、お互いの交流を深め合い将来の姉妹都市提携を目指していきたいと考えておりますし、今後も東川町から様々なラトビア情報を発信していきたいと思います。

演奏会 短信

♪…ジャズ歌手、ケイコ・マクナマラさんの演奏に合わせて、水谷鏡子さん主宰「華のハーモニー」が、次々に舞台に花を生けていくという「ジャズと華のデモンストレーション」が1月7日、目黒パーシモン小ホールで行われ、一席の空きもない大盛況だった。生け花を担当したのは水谷さんスタッフに、フローラル・プランナー養成スクールの生徒も加わって総勢7名。花が完成するたびに観客から歓声があがり、感動的な舞台になった。最後に黒のグランドピアノの前に真っ赤な作品を置いて見事に完成した。

水谷さんは「花のデモンストレーションをこれからもいろいろなジャンルの方々とコラボしていきたい」と夢を話していた。

♪…東京稲門グリークラブが2月10日、杉並公会堂大ホールで第3回定期演奏会を開き、最終ステージでは前田憲男編曲のポップスアルバムを同氏のピアノ・指揮でノリノリの演奏を披露して大喝采を浴びた。他に「日本の民謡3集（松下耕曲）」「雪明りの道（多田武彦曲）」「アイヌのウポポ（清水脩曲）。藤井威当会会長夫妻も来場された。

1200名を超える早稲田大学グリークラブの卒業生は、年代層、居住地域が多様化し、東京稲門グリークラブの他に、大阪稲門グリークラブ、横浜稲門グリークラブ、名古屋稲門グリークラブ、稲門グリークラブ・シニア会、倶楽部グリー、早稲田グリーOBメンバーズなどが様々な演奏活動を続けている。ちなみに編集者が指揮する16人編成のローガンDXも全員早稲田グリーOB。

♪…おなじみの岡村喬生当会副会長が毎年開催しているシュベルト「冬の旅」全曲リサイタルが、今年も3月22日（土）14時から上野の東京文化会館小ホールで行われる。今年のピアニストはみどり・オルトナさん。全席指定4000円。お問合せは03-3350-5638（ミリオンコンサート）へ。

♪…桜友女声合唱団（共立女子大合唱団OG）創立30周年記念第15定期演奏会が6月22日（日）14時から紀尾井ホールで開かれる。ステージ構成は「桜友30年の歩み」「三つの女声合唱曲集（Mコチャール曲）」「秋来ぬと（柴田南雄曲）」「秘密の花（西村朗曲）。指揮／大谷研二、箏／福永千恵子、ピアノ／鈴木真理子、恩田佳奈。お問合せは0422-22-3888（八木昌子）



素敵な音楽で暖かく歓迎される

鎖国の名残り

マークス寿子

私が教えている中国からの留学生が日本について作文に書いた。



新春懇親会で(中央が筆者)

日本はいい国だ、先進国だ、電車はきれいだし、人々は行儀がいい、ただひとつ自分が不満なのは、日本人は外国人に心を開かないことだ、多分、長い鎖国時代の名残りなのだろう。

鎖国の名残りか否かは別にして、四方を海に囲まれていて、つい最近まで外国人(欧米人でもアジア人でも)と暮らしの中で接触することの少なかった私たちは、国境が地続きで常に外国人とつき合いをしてきた国の人々とは異なった心理をもっているようだ。極度に外国人を崇拝してみたり、逆に外国人を拒否して日本人魂を主張したりする。

グローバル化の進んだ現在、私たちはいや応なく、異なった民族、異なった文化に育った人々につき合う必要に直面している。「異文化コミュニケーション」の必要である。そのためには、「言葉」という大問題があって、少なくとも「共通語としての英語」を学んでおきたいのだが、それ以上に大切なのは、どんな小さい国、少数民族、狭い地域に暮らす人々の文化であっても、その文化にはそれぞれ独自の価値があると知ることであろう。

今や、コカコーラやマクドナルド・ハンバーガーは世界中に存在して、それはそれで便利なのだが、どこへ行っても同じというのはおおよそ味気ない。中国の少数民族の中には、よそから訪れる人を国境で歌で歓迎する習慣のある民族がいると聞いている。そういう文化のある土地へは是非行ってみたいものである。

旅行者として空港でパスポートの審査をされる時の不愉快さ、外国人はみんな犯罪者だと思っているような入国管理職員の態度…、もちろん、日本だけのことではない。ところが、つい昨年末から、日本では短期入国の外国人旅行者や特別永住者にまでパスポート審査の時に指紋をとるようになった。かつてあんなに評判が悪くて撤廃された指紋捺捺を再び開始したのだ。9・11テロ以来アメリカで始めたのに続いて、世界でたった二国だけが実施している。入国管理職員が歓迎の歌を歌ってくれるような国…そんな夢の国にはなれないものだろうか。文化の違いはあるのが当然、いや、

あるからこそ楽しいと私は思う。あふれるほど入ってくる金儲けのためのブランド文化ではなく、これまであまり知られていなかった種々の異文化の中に、思いがけない共通点があったり魅力があることを知るの楽しい。大切に自国の文化を守ってきた人々と心を開いて語り合い、文化の交流をしたいものである。

ラトビア雑感

早稲稲門会幹事 石井 洋一

丁度一年前の事になる。ドイツで音楽の学位取得を目指していた妹がドイツ人の婚約者を連れて結婚の挨拶にやってきた。オペラシティの和食レストランで会食したのだが、背景にバッハが流れていた。この婚約者も音楽家なのですぐに気がつき、日本食とバッハの組み合わせの妙を面白がっていた。話は当然音楽のことに及び、とは言ってもこちらはドイツ語はおろか英語ですらおぼつかない状態なので、ほとんどの会話は妹の通訳を介してとなるのだが、たまたま彼がエストニアの作曲家ベルトとは一度会ったことがあるという話になり、バルト三国の連想からラトビアの音楽祭のことに話が及んだ。ところがである。「ラトビア」という国名が通じないのだ。妹も語学は堪能ながら地理には不案内と見えて、懸命に説明するのだが、なかなか話がかみ合わない。エストニアとリトアニアは通じるのになぜ「ラトビア」がわからないのか、ずいぶん不思議な思いがした。

このことをきっかけにラトビアのことをもう少し詳しく知りたいたいと思い、中公新書の「物語 バルト三国の歴史」を読んでみた。恥ずかしながら日本ラトビア音楽協会に所属しているながら、この地域の歴史には如何に無知であったことか。ドイツ人の彼がしきりに言っていたのは多分「リヴラント」という地名だったのだろう、と漸く気がついた。彼らにとってのこの地域は、未だに「エストラント」「リヴラント」「クールラント」というドイツ人が殖民して進出した時代のままなのだ。この名称は決して現在のバルト三国の国名とイコールではないのだが、こちらが考えている「ラトビア」は彼らには「リヴラント」だったらしい。

皆様には周知のことかも知れないが、もう一つ驚いたのはバルト三国という概念は第一次世界大戦後のバルト協商の時代になって成立したか

なり新しい地域概念だということ。そして、リトアニアと他の二カ国は話す言葉の系統も異なっていて、19世紀にはこれらの三国を一まとめに考えることはなかったということだ。それもそのはず、当時のリトアニアはポーランドと同君連合を形成していてどちらかといえばポーランドと一体と考えられていた。エストニア・ラトビアのかなりの部分がドイツ騎士団の入植地であり、三次に亘るポーランド分割の結果、この参加国の地域のほとんどがロシア支配下となったこと、そしてロシアにとってはドイツ人入植者が多いこの地域をそのまま西欧の窓口としておくことが大きなメリットだったことなど、この本から得たことは大きかった。

私がリガの合唱際に参加したのはラトビアがまだソ連の一共和国の時代。モスクワやレニングラードでは貨幣の流通量が少なく、買い物のおつりをスウェーデンクローネで貰って眼を白黒させたり、公園で買ったアイスクリームのおつりが飴玉だったことなどが懐かしい。しかしリガに入ると貨幣も潤沢でロシアとの貨幣経済の違いは明瞭だった。くすんだ感じのロシアの都市とは全く異なり、街も明るく西欧風の感じがした。このとき同行した先輩のドイツ語とラトビア語とで話がほとんど通じた、と聞いていたので、ドイツ人ならば当然ラトビアがわかると思っていたのだが、わかっていなかったのはこちらのほうだったというわけだ。

指揮者交流プロジェクトに同伴して

堀口 大樹

2007年10月27日から11月3日までリーガで行なわれた第3回指揮者交流プロジェクトに通訳・コーディネーターとして参加させていただきました。半年ほど前から始まったこのプロジェクトの準備においては、リーガ大聖堂合唱学校少女合唱団の指揮者であるアイラ・ビルジーニャ女史と、コンサートのコンセプトや演出選曲、指揮者の山本健二氏のマスタークラスの内容についての話し合いや、同氏の講演録「日本人の心とメロディ」、黒澤幸男氏の「日本の合唱界の現状」、そして日本語曲の歌詞をラトビア語に翻訳しました。話し合いはすべてメール上で行い、数回電話のやり取りを行ないました。

私は独学でラトビア語を勉強した

(今もしています)ため、正直自分の語学力(特に「話す・聴く」)に自信が持てず不安だったのを覚えています。ましてや環境がラトビアであれば、通訳の方向は圧倒的に「母語→(語彙量が必然的に劣る)外国語」の通訳が多くなると覚悟していたのでなおさら不安でした。しかしこの不安は時間と周りの人々の支えが解消してくれたように思います。

ラトビアに私達が滞在した1週間は、様々な人たちとの出会いがあり、また経験もできました。たくさん印象的な出来事はここでは書ききれませんが、今回のプロジェクトに参加させていただきよかったというエピソードを2つお話ししたいと思います。

準備段階で歌詞や講義録の翻訳に時間をかけましたが、特に印象に深いのは、山本氏が現地のマスタークラスで紹介した「虫の声」という歌に関するエピソードです。この歌には松虫、鈴虫、きりぎりす、クツムシ、馬おいが登場します。それぞれの虫にそれぞれの鳴き方が歌われており、日本語の擬音語がいかに豊富であることを示す好例であると共に、この歌には虫の声も敏感に聞き分ける日本人の感覚を紹介するという狙いがありました。ここで問題になったのは準備段階でこれらの虫のラトビア語を調べることでした。様々な辞書(英和・和英・露和・和露・露ラト・ラト露・英露・露英)と昆虫図鑑・広辞苑を駆使し、ようやく調べ上げたラトビア語名をマスタークラスで訳した際に聴衆から笑いと拍手をいただいた時は、調べた甲斐があったとうれしく思いました。

もうひとつのエピソードは、1週間の稽古の中で次第にラトビアの子供たちや関係者と山本氏の間でコミュニケーションが成り立っていったことでした。本来の通訳としての存在意義と矛盾するかも知れませんが、山本氏の「実際に手本を示す」指導法と子供たちの開かれた心、関係者の支えもあり、稽古のある場面では通訳など必要なく理解が成り立っていたところに、人間のコミュニケーション力の潜在性と音楽という人類共通語の素晴らしさを感じることが出来ました。

1週間という短い時間でしたが、少女達やマスタークラスの参加者が何かを感じ、日本側が伝えたかった「日本人の心とメロディ」がラトビアに残せてきていれば、そしてそれのお手伝いが自分にできていれば、と思います。また今回のような文化交流プロジェクトが今後も続いていき、実際に交流をする両国の人の輪が大きくなっていくことを願ってやみません。



ラトビア語教室第2期スタート

植木佐代

(同教室事務局)

昨年12月、6月に開講したラトビア語教室第1期が終わるに当たり、1期生は、引き続きその先の受講を希望する方、出席回数の都合などでもう一度最初からやり直してみたい方、残念ながら仕事の都合等の事情で受講を断念する方など、様々な状況がありました。そこで、引き続き受講する初級コースと、新たに学び始める入門コースを想定して、協会のご協力のもと、第2期の募集を開始しました。今回は、12月4日付け毎日新聞朝刊の「見る聴く遊ぶ 東京」紙面の「講演・講座」の欄に「ラトビア語教室」の募集記事を掲載する事ができました。その結果、初級コースは1月9日に6人で、入門コースは1月16日



第二期入門コース受講者たち

に9人でスタートしました。

初級コースは全員1期生の継続ですから、気心も知れ、和気藹々。協会が計画している7月の旅行に参加する方もいらっしゃるので、ますます熱心な学習ぶりです。入門コースのメンバーは、継続の方が4人、新規の方が5人。新規の中のお一人は、大使館からのご紹介で昨年9月にお問い合わせを下された方ですが、当時受講生が14人、補助の椅子を使わせて戴いている状況でしたので、

「次の機会には必ず」とお約束をしてお待ち戴いた方です。また、毎日新聞の記事を見て申し込まれた方がお2人、1期生からのご紹介の方がお一人、そして、7月の旅行のために一念発起された協会の方という状況です。

第2期は、1・3週が入門コース、2・4週が初級コースで、毎週大使館を使わせて戴いています。また、ゲストの方の調整でも、大変お世話になっていますが、いろいろなジャンルのお話を直接聞かせていただけるこの企画は大好評で、活発に質問が出て時間が延びてしまうことも……。映像なども交えてラトビアをご紹介戴き、事務局の私も7月の旅行に参加させて戴くことを決めました。講師の堀口大樹氏は、第1期では学習を定着させるため、宿題を豆テストで確認するなど「書くこと」を重視していましたが、2期の初級

コースでは、「話すこと」も大いに取り入れるなど工夫を凝らし、授業内容はますます充実しています。

大使館の全面的なバックアップ、堀口氏という得難い人材、そして熱心な受講生の皆様のおかげで、第2期も順調に進んでいます。

堀口大樹講師「自分自身が独学でラトビア語を勉強したため、講師という大役に不安がりましたが、幸いにもやる気のある受講生に恵まれ、またラトビア人ゲストによるラトビア紹介のおかげで大変やりがいを感じています。関係の皆様深く感謝します。今後は教材、授業の内容を充実させ、より分かりやすく、より楽しい教室になるよう努力します」。



堀口講師と事務局を支える植木さん

関西学院のラトビア人教師 イアン・オゾリンのこと

日本の音楽に大きな影響

新年会に歌手の小田陽子さんが参加された（関西）学院史編集室便り（07・12・14）に、1918年から21年にかけて同学院で英語教師として教鞭をとったラトビア人、イアン・オゾリンのことを7ページにわたって特集している。当時のオゾリンの著書「琥珀の国」で、独立（1908年）前のラトビア事情を詳述し極めて興味深い。アリア語系の国語を分析し、ラトビア人は「欧州最古の国民」と自負する。

編集者が最も関心を持ったのは、この特集の筆者が、関西学院の第二校歌ともいえるべき「緑濃い甲山」（由木康詩・山田耕作曲、1939年誕生）は、オゾリンの影響が大いにあると考察していることだ。以前からあった校歌「Old Kwansei」や「空の翼」とは対照的に、ナポリ民謡を思わせるような美しく穏やかなメロディーであり、歌詞も「樹々、白亜、光、信、知識、力」などが物静かにつづられている。

由木康は賛美歌の作詞・訳詞で知られ、その数は600を越える。有名な「きよしこの夜」も由木の訳詞である。この由木が関西学院在学中、オゾリンの教え子だった。後に「最も影響を受けた師」だと述べているが、本稿の考察は次のように記述している。

◇

「新校歌制定に当たって、由木と

山田の間でどんな会話が交わされたかは想像の域を出ないが、キリスト教主義教育を建学の精神とする関西学院で学んだ二人が、時局を考えて作った校歌であるなら、その奥に深い思いが秘められている可能性がある。それが賛美歌としか思えないメロディーであり、スクール・モットーであるMastery for Serviceを織り込んだと伝えられる歌詞ではないだろうか。この歌を作る時、由木の胸にオゾリンの教えが去来していたとは考えすぎであろうか。なぜなら、ラトビア人こそ様々な思いを歌に込めてきた民族だからである。1841年、ドイツ人地理学者コールはこう言った。「ラトビア人は、誰でも詩を詠み、誰もがその詩を歌うことができる」。ヴィーチェ・フレイベルグ大統領によれば「民謡はラトビア人のアイデンティティーの核であって、歌うことはラトビア人である証拠の一つである」。1920年初頭に作られた国家は、ソビエト・ロシアの強制併合されていた間、その存在を抹殺されていた。代わりに、第二の国歌として反抗の精神を込めて歌われたのが、民謡「風よ、吹け」であった」。

◇

こんな記述もある。「オゾリンは当初、ロシア人と記されていたが、当人はラトビア人と書いて欲しかったであろう。なぜならオゾリンはラトビア人とロシア人の違いについて（はっきりした根拠で）力説していたからである」。「ロシアの歌と信じ込んでいた「百万本のバラ」が実はラトビアの歌であることを知った小

田陽子さんは、自らラトビアまで飛んで関係者に会われ、原曲「マーラが与えた人生」のCD化を実現された。おかげで、今はこの歌を日本語で聞くことができる。21世紀に生きる日本人女性の感性と行動力をオゾリンが知ったら何と言うだろうか。それこそ100万本のバラを小田さんに捧げることだろう。一方、バルト諸国をナチスから開放したのは

スターリン率いるソビエトだとするプーチン大統領の言い分に対して、オゾリンは「こぶしを振り上げ、足を踏み鳴らし、口角泡を飛ばして」反論するに違いない」。

※筆者は注書きに、ラトビア人と歌について、黒沢歩著「木漏れ日のラトヴィア」を参照したと記している。※全文お読みになりたい方は編集室へ。コピーを差上げます。（徳田記）

情報断片

○…新春懇親会でも話題になりましたが、商船三井客船の西回り世界一周クルーズが4月に出発し5月24日にリガに着岸します。三島市在住の坂本旭会員が乗船されるそうです。坂本さんはラトビアの民族楽器「コクル」に関心を持たれて、編集室に質問が寄せられたのが当会入会のきっかけになりました。日本では殆んど未知のこの楽器のことを、加藤専務理事がリガで詳しく調べて坂本さんに返事し、さらに在日大使館が、着岸の日にコクル演奏を生で聴ける情報を届けるという経緯があり、坂本さんは大変楽しみにしておられるようです。未知の人の問合せに克明に返事した加藤専務や、リガを訪れる一観光客に最大限の親切に対応した大使館オレグさんの心にとっても暖かいものを感じ冒頭に触れました。○…コクルは弦楽器の一種ですが、写真で見ると日本の琴を小さくした感じです。いろいろな種類のコクルでアンサンブルが行われ、主にフォルクスローレが演奏されるようで

す。演奏用のものは全てオーダーハンドメイドで、技術者が極めて少ないそうですが、国が支援して職人・後継者の養成に努力しています。現在ラトビアには約20のコクルアンサンブルがあり、7月の「歌と踊りの祭典」見学ツアーでは間違いなく生演奏を聴けると思います。

○…当会メンバーでもある桜楓、桜友女声両合唱団は、いわゆるママさんコーラスとはひと味もふた味も違う意欲的な演奏活動を続けています。桜楓合唱団が松下耕氏に委嘱したミサ曲はとても新鮮で力作でした。同氏編曲の「さだまさし作品集」は、耳慣れた曲がより魅力的に響いて大好評でした。スタイルが対照的な桜友女声の6月の演奏会も楽しみです。（短信参照）

○…早稲田大学グリークラブ出身の若手プロ指揮者田中宏君が2月11日、合唱団「ボトフ」の演奏会でラトビア合唱曲集を演奏しました。93年に初めてリガを訪問した時、同国の合唱力に感嘆した一人ですが、当会に若いパワーを注入してくれそうです。（徳）

※ の方々が新しい入会者です

(氏 名)	(県 名)	(所属等)	小 山 雄 二	大 阪	(財)啓明社 専務理事	根 本 保 子	東京	日本フィル協会合唱団
[名 誉 会 員]			齋 藤 哲	神奈川	日本経済新聞社社友	野 瀬 一 郎	東京	早稲田大学グリークラブ
ベーテリス			坂 牛 八 州 ※	兵庫	立教大グリークラブOB			会
ヴァイヴァルス ※	日 本	駐日本国ラトビア共和国大使			会 保 育園長 牧師	野 村 壽 子	東京	(株)ネットワーク21
[個 人 会 員]					スロカントルム福島／	野 村 三 郎	ウィーン	メロス音楽研究所代表
相 原 徳 子 ※	神奈川		坂 田 知 子	福島	マネージャー	萩 原 淑 子 ※	東京	英オヴァオリンスクール
青 木 哲 也	北海道	北海道東川日本ラトビア	坂 場 孝 之	千葉	稲門グリークラブシニア			AMADE
		交流協会会長			会			
赤 池 喜 代	徳島	女声合唱団 フラウリッ	坂 本 旭 ※	静岡	三島市医師会	秦 フ サ	東京	
		ヒ ヴォカール	嵯峨山 まり子	兵庫	魚住コーラス「わかくさ」	原 健 之 ※	東京	日英協会
荒 井 秀 子 ※	埼玉	日本エストニア友好協会			指揮者	久 元 祐 子	東京	ピアニスト
安 斎 眞 治	千葉	早稲田大学グリークラブ	桜 井 珊 子	東京	桜楓合唱団／会長	肘 井 哲 子 ※	千葉	
		OB会会長	迫 秀 一郎	東京	サン ル ー ト プ ラ ザ	藤 井 明 子	東京	(株)みずほコーポレート 銀行
飯 塚 美沙子 ※	神奈川				東京総支配人	藤 井 威		／顧問
池 上 隆 一	東京	早稲門会	佐々木 武 彦	東京	東京混声合唱団	福 井 忠 雄	東京	福井自動車(株)／会長
石 井 洋 一	東京	青山学院大学グリーンハ	佐々木 憲 元 ※	青森	早稲田大学グリークラブ	藤 原 桂 子	兵庫	女性指揮者の会／代表
石 渡 迪 康	千葉	モニー合唱団OB会			OB会	風呂本 武 敏	兵庫	愛知学院大学教授
		元副会長	佐 藤 ますみ ※	東京	(株)コンサートサービス	風呂本 惇 子	兵庫	城西国際大学教授
石 川 晴 彦	東京	(株)出版文化国際交流会専	椎 野 寿 子 ※	徳島	フラウリッヒ ヴォカール	堀 内 啓 吉	神奈川	早稲田大学グリークラブ
		務理事	島 田 精 一	東京	住宅金融支援機構理事長			OB会
石 川 了	東京	東北新社／クラシカ・ジ	清 水 卓 爾	東京	東京稲門グリークラブ	堀 俊 輔	埼玉	指揮者
		ャパン	清 水 信 行	神奈川	三井物産(株)／(元)常務	堀 口 大 樹	東京	東京外国語大学
石 原 祥 弘	千葉	早稲田大学グリークラブ	清 水 光 子	東京	取締役	前 田 幸 子	兵庫	神戸中央合唱団
		OB会	清 水 博 郎	東京	(株)アイラス／取締役	前 田 二 生	東京	指揮者
石 坂 廬	神奈川	笹川平和財団			国立楽器	松 原 千 振	兵庫	東京混声合唱団／常任指
磯 部 光 正	東京	早稲田大学グリークラブ			慶応義塾ワグネル・ソサ			揮者
		OB会	ジャネット・スードニエツエ		ィエティ男声合唱団三田			
板 垣 忠 直	福島	福島県芸術文化団体連合	ラトビア		会 会長	松 本 数 馬	東京	三井住友VISA
		会副会長	白 井 克 彦	神奈川	パレックス銀行	満 田 武 敏 ※	東京	(株)ワールドクリエーション
伊 東 一 郎	埼玉	早稲田大学文学部教授	白 石 仁 章 ※	東京	早稲田大学総長	水 谷 鏡 子	東京	(有)華のハーモニー
稲 山 輝 機	神奈川	毎日新聞／顧問	菅 谷 信 雄	東京	外務省 外交史料館	三 巻 義 夫	神奈川	横浜稲門グリークラブ
井 下 佳 和	北海道	北海道東川ラトビア交流	杉 浦 保 友	千葉	(有)マーキュリー物産	宮 崎 勝 治	神奈川	(元) 朝日新聞ヨーロッ
		協会	鈴 木 健 三	神奈川	一ツ橋大学教授			パ総局長
岩 崎 朋 子	東京	(有)果実／代表	鈴 木 秀 洋	東京	鈴木人事総合研究所			
植 木 佐 代 ※	東京	桜楓合唱団	鈴 木 洋 子	兵庫				
内 野 力	東京	日本ビュレレット・パッ	洲 脇 光 一	東京	合唱指揮者	村 山 喜一郎	埼玉	日本エストニア友好協会
		カード(株)	関 口 教 和	東京	稲門グリークラブシニア	森 川 智	東京	ヤマト科学(株)
額 原 信二郎	東京	早稲田大学グリークラブ			会	矢 田 ちひろ ※	東京	ピアニスト
		OB会	滝 澤 文 一	東京	リャザン・ロシア国立教	矢 田 廣 ※	東京	不動産鑑定事務所
遠 藤 守 正	神奈川	遠藤税理士事務所	武 内 正	東京	育大学	八 木 昌 子	東京	桜友女声合唱団／責任者
大 澤 寛 之	埼玉	稲門グリークラブシニア	館 野 美 久	東京	武内公認会計士事務所	山 中 祥 弘 ※	東京	ハリウッド美容専門学校
		会			国際臨海開発研究センタ	山 本 恭 子	兵庫	コーロ・アロードラ
大 成 宣 行 ※	東京		田 中 享	東京	ー	山 本 健 二	千葉	声楽家 指揮者
岡 地 和 道 ※	東京	岡地(株) 代表取締役社長	田 中 宏	山形	註日ラトビア大使館顧問	山 本 茂 男	東京	稲門グリークラブシニア
岡 村 喬 生	東京	オペラ歌手	田 摩 勇	千葉	日本の歌を歌う会			会
岡 安 弘	東京		筑 紫 哲 也	東京	NHKエンタープライズ	山 本 徳 行	福岡	北九州スウェーデン
岡 安 陽 子	東京		辻 田 行 男	埼玉	ジャーナリスト			名譽領事
小 川 翠	東京	邦楽演奏家	土 屋 昌 也	東京	辻田建築事務所	山 元 淑 乃		
小 田 陽 子 ※	東京	新座ロータリークラブ	戸 叶 孝 一	東京	稲門グリークラブシニア	山 根 秀 夫	兵庫	神戸新聞会長
小 野 啓 祐	埼玉	早稲田大学グリークラブ			会	山 脇 卓 也	東京	日本無線(株)／合唱指揮者
小 侯 泰 英	千葉	OB会			平成ビジネスアソシエイ	吉 田 ラスマ	埼玉	(元) 外交官 (ラトビア
			戸 田 智 子	東京	ツ			共和国外務



私たちは人びとの健康を高め
心豊かな社会づくりに貢献します

 大鵬薬品

<http://www.taiho.co.jp/>